

## 茶道の世界

松山市立東中学校一年（愛媛県）

## 松中 あゆみ

初めてお抹茶を飲んだ幼稚園生の時、苦くてもう二度と飲みたくない私の中で抹茶は苦手なものになっていた。

そんな私が友達に誘われて中学の茶道部の体験入部に行った。「絶対に入部はしないからね。付き添いだけだよ」そう言いながら茶室に入っていた。ざわめく外の世界とは切り離された静かな空間、もてなされているという温かい雰囲気、なにか居心地の良い、厳かだけれどそれでいて楽しい不思議な感覚があった。私はこの不思議な時間をこの一回限りで終わらせるのがもったいなくて茶道部に入部した。

入部した当時はまず作法から習う。挨拶では手をつく位置、角度。帛紗さばきも茶筌の持ち方もとにかく細かいところまでビシッと型がある。私は驚きながらも「あー、バレエと一緒にだ」と思った。

私は幼稚園の時からバレエを習っている。バレエにも全

ての動きに決められた型がある。足のポジションから始まり手足の運び、角度、視線の付け方、体の向き、息の仕方まで決められているのだ。そうした型を身体に徹底的に覚え込ませ、頭の先から足先まで意識を張り巡らせ自然に動けるようになって初めて自分の踊りになる。感情を踊りに入れながら自分らしさや美しさを表現する。

とにかく最初はこの茶道の型を覚えなきゃと先生や先輩の動きをしっかりと見るところから始まった。

もう一つバレエとの共通点がある。間合い、息遣いだ。バレエの群舞というみんなと同じ踊りを踊る時、私は周囲のわずかな空気の変化や息遣いを感じて踊っている。まだ茶道を習い始めて三か月しか経っていないが、そうした独特の間合いや息遣いが茶道にも感じられるようになってきた。お菓子を出すタイミング、お点前を始めるタイミング、お抹茶を出すタイミング、もてなすお客様との間合いがあるように思う。いかに相手のことを感じ、相手が居心地よいと感じるタイミングでもてなすかが大切のように思う。

茶道部に入り三か月経った今でも、やはりお抹茶は少し苦手だ。飲むようにはなったが美味しいという思いには至っていない。しかし点てるお茶によって味が違うことがある。濃さやお抹茶の品質の問題ではないのだ。恐る恐る初めて茶筌を握って点てたお茶、きれいに泡立てようと一所懸命点てたお茶、泡立ちは不十分だけど丁寧な時間をか

けて点てたお茶。初めて家族に飲んでもらうために心を込めて点てたお茶、おかわりが欲しいと言われ慌てて点てたお茶。味が違うと言われ私もそのお茶を飲んで『あれっ?』と感じたこと。どうお茶を点てることが正確なのかも分からない中で私はこの感覚を大切にしようと思った。

茶道という一見今までの私とはなんの繋がりもなく思えた独特の世界もバレエとの共通点を見つけるといふ発見があったり、家族でお茶を飲むという新しい楽しみが増えたり、部活での先輩や友人との厳かだけど楽しい時間を持てたり、今私は茶道が楽しくてたまらない。新しい世界の始まりだ。